名誉会員 三木栄先生の御逝去を悼みて

蒲原　宏

平成四年十二月二十日、心から敬慕申し上げていた医史学研究の大先輩三木栄先生とは永久にお話できぬこととなってしまった。

日本医史学、いや世界医史学の巨星墜つと言っても過言ではない。享年八十九歳であるが、もう少し御元気でいてほしかったと思うのは私だけではなかろう。先生と初めてお会いしたのは昭和三十年四月三日、四日、第五十七回日本医学会総会が京都市東山七条の京都女子大学で開催された時であった。内山孝一会長、大矢全節準備委員長の下で先生の特別講演「朝鮮医育史（新羅―高麗―李朝）」を拝聴した。その地味な研究と資料の豊富さに圧倒された。その時、ガリ版刷りの『朝鮮医学史及疾病史』の申込みをし、十二月に、郵送され、奥付を見て驚いた。「昭和廿三年稿成、昭和廿八年一月刷始、昭和卅年十二月刷終」千二百頁の大冊である。百部の私家版であった。

三木栄名誉会員

翌三十一年十月『朝鮮医書誌』百二十部の私家版が出版された。何れも文部省科学助成補助金による刊行物であって、後年思文閣から出版されたが、身を削る労作とはこのようなものを言うのかと感銘新なるものがあっ

た。これは、後に韓国科学史学会感謝牌賞、日本医師会最高優功賞の栄誉を受賞された。先生のこの大業績は学士院賞を受賞されるべき学問的業績であったのではなかったか。未だに、なぜ学士院賞受賞の対象とならなかったのか不思議でならない。

ふり返ってみると先生は四十五歳でこれらの大著を完成されておられるのであるが、その後昭和六十年に六百頁余の『朝鮮医事年表』を完成出版されている。八十歳を越えての著作であるから瞠目すべき業績といえよう。旧京城帝大内科助教授、そして水原の病院での勤務の傍ら蒐集された、朝鮮医学の古典籍は膨大なものであり、それを基としての業績の蔭にはそれを支えた夫人をはじめ御家族の協力もまた大変な事であったと思われる。先生は「屑屋が持って来たものを選ばずにどさっと置いてゆかせて全部買取ったまで」と何気なくおっしゃっていたが、戦前の大らかな時代とはいえ、その事すらなかなか容易にできる業ではない。

そして、不撓不屈、如何なる時も学問を忘れぬ真摯な姿勢と積極的な先生は壮大なこのライフワークをまとめられた。第二の業績は、内山孝一先生の示唆にもとずいて、富田林市で伏屋素狄の子孫を捜し出し、そのお宅から、江戸時代における世界医学史的に見ても、独創的な解剖・生理学的実験すなわち、腎の尿生成に関する演説実験、胆嚢機能・乳摩管に関する実験をはじめ男女生殖器の機能に関する実験を行っての実像を証明した第一次資料を発見し、中野操先生との共同研究として発表された。伏屋素狄の子孫宅に眠っていた素狄直筆という数十枚の解剖生理学的実験図とその他の遺品は先生の手によって初めて世の脚光を浴びることとなったのである。先生のエネルギッシュな学問的情熱がなければ、山脇東洋の解剖、賀川子玄の産科・華岡青洲の外科とならぶこの日本の近代医学発展の曙期の資料と業績の全貌が永久に埋れてしまっていたにちがいない。

その研究結果は「伏屋素狄の研究特集」として『醫譚』復刊七号（昭和三十年三月発行）によって詳細に発表された。この特集はあたかも一対の「御神酒徳利」のように、中野操先生の担当された論文と先生の論文が一対をなしているも

のである。総説から始る、素狄の生涯素描、素狄の交遊、素狄の蘭学における学統、素狄の家系、家系、略伝、著述そして素狄の解剖生理学実験、寛政十二年の女屍解剖時における実験、生理学史上における素狄、年表という広範かつ周到緻密な五〇頁余にまとめられた論文は、戦後における日本医史学研究における最も質の高い研究成果である。

時、あたかも伏屋素狄が『和蘭医話』を出版してからちょうど一五〇年目にあたり、素狄の不朽の学問的業績を時宜を得て顕彰することができたのである。この研究により伏屋素狄の独創的な業績ばかりでなく、寛政十二年の女屍解剖には大矢尚斎、各務文献、伏屋素狄そして恐らく橋本宗吉、中川元吾ら一群の洋学者たちが参加したことが立証されたことである。即ち東大医学部解剖学教室、武田杏雨書屋、阿知波五郎氏蔵の解剖図、それにかつて富士川游、呉秀三博士が実験し、記録された各務文献の解剖図巻も同じものを描写したものであることまで立証されたのである。まさに精緻な考証の行われた医史学論文であって、後学の範となり、年月の経過とともにその評価が高まっている。

先生の第三の業績は『体系世界医学史』の編集出版である。阿知波五郎先生との共著であるが、その大部分は先生の執筆で、昭和四十七年医歯薬出版株式会社から出版された。五百五十頁にもちかい本書は、その後の阿知波先生との共著『人類医学年表』（昭和五十六年思文閣出版）とともに医史学研究者必携の書である。

第四は医の倫理に関する著作であるが、真摯な臨床医であり、医史学研究者としての実践と哲理の合一した医の倫理の本質を深く考えさせられるものばかりである。学閥などの障壁で、先生の膨大な著作が全て自費出版であり、そのために研究ずみの蔵書を売り払われるという経済的な苦労をされたが、中野操、阿知波五郎、岡西為人、宗田一、田川孝三氏等の学究をはじめ、多くの善意の方々と御令室シズエ、御子息謙という蔭で支えておられた御家族に恵まれたことは何と言っても羨しい限りである。

金貧乏はしたが人貧乏、知の貧乏をせず、八十九年の努力精進の道を歩まれたことは素晴らしいことであった。間重富、木村兼葭堂以来の関西在野の学問樹立の伝統的精神の実践生活を見事に果されたのが、わが尊敬あたわざる三木栄

先生の御生涯であったと思うことしきりである。

心からの御冥福をお祈りするとともに、先生の偉大な御業績を心から鑽仰しつつ、在りし日をお偲び申し上げる次第である。

（新　潟　市）